

東北地域における担い手の地域性

藤森 英樹・加藤 好武・五味 唯孝

(東北農業試験場)

Distribution Pattern Analysis of Agricultural Labor Force in Tohoku District

Hideki FUJIMORI, Yoshitake KATO and Tadayuki GOMI

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

近年, とくに1990年センサス分析などを通じて農業の担い手不足・高齢化の進行が指摘されている。しかし, その進行の程度は経営的条件や地域の社会経済的条件に規定されて地域性がみられると考えられる。ここでは東北地域において担い手がどのように分布しているのか, また, 担い手の多い少ないによってどのような特徴があるのかについて考察する。

2 試験方法

東北地域の市町村別のセンサス調査結果を用いて, 下に示す担い手に関する2指標(以下担い手指標)を算出して1975年から1990年にかけての動向について検討する。また1990年の担い手指標を用いて市町村を類型化し, その地理的な分布状況を示し, 担い手類型とあとの就業状況, 所得, 耕作放棄地との関連性について考察する。

なお, ここでは担い手を家族経営に限定し自家又は自営農業に従事する者として捉える。

①担い手指標Ⅰ(担い手の量を示す): 農家1戸当たり自家農業従事延べ日数。各市町村ごとに, 従事日数階層別自家農業従事者数に従事日数階層区分の中央の値(150日以上は200日とした)を乗じたものを累積して求めた総延べ日数を総農家数で除して求めた。

②担い手指標Ⅱ(担い手の高齢化の程度を示す): 自営農業(1975年は自家農業)従事者の平均年齢。各市町村ごとに①と同様にして求めた年齢階層別の延べ日数に年齢階層区分の中央の値(65歳以上は70歳とした)を乗じたものを累積したものを総延べ日数で除して求めた。

3 試験結果及び考察

(1) 市町村別担い手指標の動向(図1参照)

東北地域の市町村別の担い手指標を1975年と1990年について図1に示した。

1975年(×印)においては右下がりの分布傾向がみられ, 農業従事延べ日数が多いところでは平均年齢も比較的若いことが示されている。これが1990年(○印)には全体として左上にシフトし, 延べ日数で0~100日減少し, 平均年齢で6~9歳増加している。しかも1975年のはっきりした右下がりの傾向はくずれ, 農業従事延べ日数の多いところでも高齢化が進んでいる。このように全体的傾向としては延べ日数の減少と高齢化が進んでいる。しかし, 1990年において延べ日数で大略50~500日, 平均年齢で45~65歳の

間に広く分布している。また, 表には示さなかったが, 1975年から1990にかけて延べ日数が100日以上減少している市町村が66ある反面, 増加している市町村も37あり, 一律に担い手が減少していると捉えることはできない。

(2) 市町村別担い手指標の分布(図2参照)

各市町村を2つの担い手指標によって表1に示したように類型化し, それを地図に塗り分けたのが図2である。延べ日数を縦軸, 平均年齢を横軸で示した。延べ日数200日未満かつ平均年齢55歳以上(凡例の上から3番目)の類型, つまり担い手不足が進んでいる地域は, 青森県下北, 岩手県北部・東南部, 宮城県中部・南部, 秋田県県北, 福島県会津などに分布している。他方, 延べ日数300日以上又は平均年齢50歳未満(凡例の上から1, 4, 7, 8番目)の類型, つまり担い手が比較的確保されている地域は青森県西北・中南・上北・三戸, 岩手県北部・北上川上流・東南部, 宮城県北部・東部, 秋田県県南, 山形県最上・庄内, 福島県中通りなどに分布している。またこれら担い手の確保されている地域の中では水田地帯では平均年齢が若く, 果樹・畑作地帯では延べ日数が多いという傾向がみられる。

(3) 担い手指標による類型化と各類型の特徴(表2参照)

表1に示した担い手指標の区分値によって市町村を8つの類型に分け, 類型ごとにいくつかの指標を示し特徴をみ

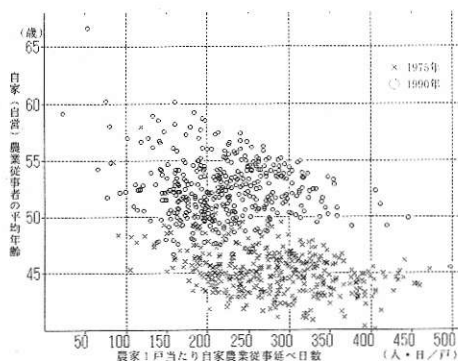


図1 東北地域における市町村別担い手指標の推移

表1 担い手指標による類型化と該当市町村数(1990年)

平均年齢 延べ日数	50歳未満	50~55歳	55歳以上	計
200日未満	26	102	29	157
200~300日	39	136	28	203
300日以上	7	36	—	43
計	72	274	57	403

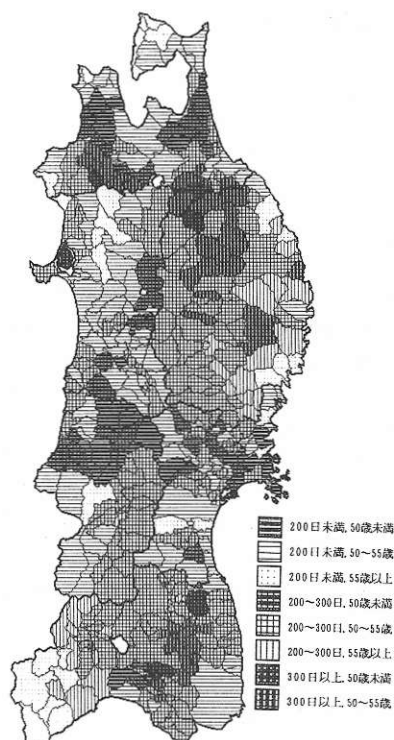


図2 市町村別担い手指標類型別分布

てみる。

1) 農家のあとなぎの就業状況

あとなぎの就業状況は当然担い手指標に反映されているが、類型ごとにどの程度あとなぎがいるのかをあとなぎの就業状況にみている。あとなぎが自家農業に主として従事している農家率をみると、延べ日数が多いほどまた平均年齢が若いほど高くなる傾向がみられる。とくに300日以上、50歳未満の類型では17%に達している。この類型は7市町村と数は少ないものの6戸に1戸の割合で農業生産のあとなぎが確保されているといえる。

一方、あとなぎが他出していたりいない農家率は、平均年齢が高いほど高くなっている。あとなぎがいない農家の中にはあとなぎ層が若齢のために未定である農家も含まれるため、これら農家すべてにあとなぎが確保されないとは言えない。しかし、あとなぎ層が他出してしまっているために担い手の高齢化が進行していることが推測される。

2) 所得

耕地10a当たり生産農業所得については、延べ日数が多いほどやや高くなる傾向がみられるが顕著な差はみられない。農家1戸当たり生産農業所得は、延べ日数が多いほどまた平均年齢が若いほど急激に高くなっており、担い手の確保と所得とは強い関連があることを示している。

3) 耕作放棄地

耕作放棄地については、平均年齢が55歳以上の類型で農

表2 担い手類型とあとなぎの就業状況・生産農業所得・耕作放棄地 (1990年)

1戸 当たり 農従延 べ人数		あとなぎの就業状況 (%)					生産農業所得 (千円)		耕作放棄地 (%)	
		同居あとなぎいる			他出あとなぎ いる	あとなぎ がいない	耕地10a 当 たり	農家1戸 当 たり	農家率	面積率
		自家農業 が 主	その他の 仕事为主	仕 事 に従事せず						
200日未満	50歳未満	6.8	46.8	6.6	4.5	35.3	77.0	1,239.0	6.9	1.1
	50～55歳	4.7	48.7	6.1	7.0	33.3	78.9	1,129.7	15.4	3.3
	55歳以上	2.7	41.8	5.3	13.8	36.3	74.4	969.9	28.4	8.6
200～300日	50歳未満	11.3	44.9	6.6	4.6	32.6	81.9	1,672.2	5.8	1.0
	50～55歳	7.0	47.6	6.1	6.7	32.5	86.7	1,407.2	13.4	2.5
	55歳以上	4.3	42.8	5.4	13.4	34.1	77.3	877.9	26.4	7.1
300日以上	50歳未満	16.6	38.1	6.9	5.8	32.6	88.1	2,743.7	14.1	1.5
	50～55歳	10.8	40.6	5.7	7.7	35.2	91.6	1,622.1	12.9	2.6

注. 生産農業所得は1988年～90年の平均を1990年の耕地面積、農家数で除して求めた。

耕地放棄地面積率は「耕作放棄地面積」を「経営耕地面積+耕作放棄地面積」で除して求めた。

資料：『生産農業所得統計』『耕地面積統計』『1990年農業センサス』

家率26～28%、面積率7～9%ととくに高く、高齢化した地域で耕作放棄が進んでいる点が注目される。なお、担い手の存在する300日以上、50歳未満の類型で農家率が14%と高いが、面積率では2%と低く、これらの地域では条件の不利な一部の圃場を耕作放棄し、他の圃場を集約的に利用しているのではないかと考えられる。

4 ま と め

以上、市町村別データを用いて担い手の量と高齢化の程

度を指標として東北地域における担い手について分析した。全体としては減少・高齢化しているが市町村によっては延べ日数が増加しているところもあり、多様性がみられることが示された。具体的な地域における担い手のあり方を検討するにあたっては、当該地域の東北全体の中での位置づけを念願におきながら地域条件との関連を分析する必要がある。